

電車から降りた夢子は足早に改札出口へ向かっていた。

時刻は18:30。

待ち合わせは19:00だから、かなり早く到着することになる。

まるで付き合いたての恋人同士の待ち合わせのようだ。楽しみにしてると思われたら恥ずかしい。

少し歩くスピードを落とす。

それでもあと数分で着いてしまう。

あの日。

仕事にくたびれた夢子が電車で集団の〇〇に襲われ、気持ちよくとろけさせられた日。

挿入までしてきた〇〇の2人と、電車を降りたあと連絡先の交換をした。

本当はあのままラブホテルでも行って続きをするつもりだったらしいのだが、次の日も仕事があった夢子は惜

しみながらも断ってしまったのだ。

先に挿入してきた男が淳哉(じゅんや)、黒髪で表情のよく見えなかった大男は樹(いつき)と名乗った。

後から知ったのだが彼らはSNSで見かけた集団〇〇の誘いであの電車に乗っていたらしかった。

2人に面識はなく、当日電車内で〇〇して初めて相手と顔を合わせたとのこと。

そして淳哉から

『次の土曜日に3人で会わない?』

とメッセージが来た。

3人で会って何をするのかはもう明らかだった。

あの日、快楽に負けた自分を思い出す。

思い出すだけで体が熱くなって子宮がうずいてしまう。

あんなに強烈な快感は初めてだった。

自分の中で何かのリミッターが外れてしまったようだった。

『いいですよ』

断る気などさらさらなかった。

楽しみだと感じていることを夢子は自覚していた。

「夢子ちゃん、早いね」

待ち合わせ場所に行くと既にそこに淳哉がいた。

初めて見たときから思っていた。

とても〇〇なんてするような男には見えない。

清潔で爽やかな見た目の男。

自分はこの男とセックスするために来たのだ。

「こ、こんばんは」

緊張したままの夢子が笑うと

「夢子ちゃんに会うの楽しみで俺も早く来ちゃったよ」
と淳哉は笑った。

「…こんばんは」

2人で笑い合っていると、すぐそばで低い声がした。

「なんだ、樹くんも早いね！」

声のしたほうを振り向くと樹がぺこっと頭を下げる。

「なんだか2人に会うと思ったらそわそわしちゃって…、早く着いたと思ったんですけど、2人のほうが早かったですね」

「なんだ～、結局みんな今日が楽しみだったんだな」

樹が夢子と淳哉のそばに立つ。

今日はキャップをかぶっているが、相変わらず長い前髪から覗く目は暗く表情はよく見えない。

夢子が背の高い彼を覗き込むと不思議そうに首を傾げた。

最初に会った日から何度もメッセージのやり取りをしていたせいか、少し柔らかい雰囲気を感じた。

この男とも、今日はセックスをするために来た。

周りから見たらどう見えるのだろう。

今日は食事をしてからホテルへ向かう予定になっている。

しかし夢子の下着は既に濡れてしまっていた。

————バタンッ

「…うんっ、ん、む…っ、ふ、……う♡」

ホテルの部屋に入るなり、淳哉に抱きしめられキスされる。

その後ろで樹が開けっ放しだったドアを閉めて鍵をかけた。

ぢゅっ♡ぢゅっ♡

ぢゅぼっ♡♡ぢゅるっぢゅるっ♡♡

「っん…♡ちゅ、ふ♡んん……♡」

舌をぢゅぼぢゅぼ吸われる激しいキスに、夢子は体の力が抜けそうだった。

先ほど軽く飲んでいたお酒のせいもあってふわふわする。

淳哉にしがみつこうとしたがその前に樹に体を奪われ軽々と抱えられてしまった。

「ベッド、行きますよ」

「うん…」

激しいキスから引き離され、余韻に浸ったままベッドまで運ばれる。

そのまま優しくふかふかのベッドに寝かされ、今度は樹の唇がゆっくり降りてきた。

「あむ…♡♡♡う♡は、あっ♡んむ…♡♡んう…♡♡」

ちゅ…♡

ちゅ…ちゅ…♡♡

この間のとは違う、力の抜いた舌同士が絡まるような、とろけるキスだった。

2人の舌が絡まる音の向こうで、淳哉の声が聞こえる。フロントに電話しているようで「宿泊をお願いします」と言っているのが聞き取れた。

(宿泊なんだ…)

予め予定を決めていたわけではなかったが、少なくとも淳哉は一晩中ここにいるつもりらしい。

それとも淳哉と樹となんらかのやり取りがあって2人で決めたのかもしれない。

(一晩中…セックスするのかな…)

期待してしまう。

きっとまたへとへとになるまで気持ちよくされてしまうだろう。

ちゅる♡♡ちゅっ♡♡♡

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡

「…夢子さん、舌、熱い」

「夢子ちゃんけっこう酔ってる？それとももうえっちな気分になってるのかな」

電話を終えた淳哉がベッドへ乗り上げ、樹とキスしている夢子を背後から抱きかかえた。

後ろから夢子を抱きしめ首元に顔をうずめる。

くすぐったさに肩をすくめる夢子の体を押さえつけ、淳哉は夢子の胸をやわやわと揉みはじめた。

大きな手のひらに包まれる胸に鳥肌がたつ。

その間も樹の唇と舌は離れない。

淳哉の胸に背中を預け、夢子は一生懸命に樹に舌を吸われていた。

「夢子ちゃん体熱いね♡あったかくて抱っこしてると気持ちいいよ」

「んうっ♡♡♡」

淳哉の指が服の上から軽く乳首を引っかける。

夢子はそこで自分の乳首が既に立っていることを自覚して恥ずかしくなった。

まだ触られてもいないのに期待だけで立っている。

すり♡すり♡

「は♡あっ♡」

「服、脱がすね♡」

すり♡すり♡すり♡

淳哉の指が乳首を刺激したまま器用に夢子の服をほどこいていく。

「んっ♡♡う♡ちゅっ♡♡うむっ♡♡ん…っ♡♡」

すり♡♡すり♡♡すり♡♡

舌を優しく吸われ、乳首を優しく撫でられ、
夢子の体がとろけていった。

電車の中で触られたときもそうだった。

自分の頭と体がとろとろと溶かされる感覚がたまらないのだ。

淳哉の片手が下着を下ろしていると、キスしたままの
樹の指が待ち切れない様子で足の間に滑り込んできた。

太いたくましい指が優しく割れ目をなぞる。

そして夢子の舌を吸い出し、まつ毛の触れそうな距離
で夢子の視線を捉えた。

「もうぐちょぐちょですね」

「……っ♡♡」

至近距離で見つめ合ったまま、樹の指が中へ入ってくる。

「あ…っ♡あっ♡」

こんなに近くで樹の目を見るのは初めてだった。

吸い込まれそうな力強い瞳。

欲情している。

その男の指が自分の中に侵入してくる。

「は、あ…っ♡♡あ…っ♡♡樹く、…………んんっっ♡♡♡」

夢子の足が跳ねた。

名前を呼ぶと樹の指が中でくにと曲がったのだ。

それがちょうどいいところに引っかかりながらゆっくり進んでくる。

「気持ちいいねえ♡夢子ちゃん♡」

「気持ちいい、です♡気持ちいい…っ♡♡」

後ろから乳首をすりすり♡と愛撫する淳哉に答えた。

樹の目を見つめたまま。

「優しく触ってるだけなのにもうこんなに気持ちよくなってたらこれから大変かもよ？♡♡」

「…っ♡♡だって、全部気持ちいい、です♡あっ♡あっんっ♡♡」

奥まで侵入した樹の指がゆっくり引き戻っていく。
広げられた中が閉じていく感触にすら感じてしまう。

ぷちゅっ♡

「あッ♡♡」

またそのままの指が押し入って。

ずるるっ♡

「ううっ♡♡く…っ♡♡♡」

引き戻っていく。

すりすり♡♡

すり♡すり♡すり♡

乳首は優しく擦られたまま。

「はっ♡♡あっ♡あぁっ♡♡あッッ♡♡♡あっ♡♡いい
っ♡きもちいい♡♡」

ぷちゅっ♡♡

ずるるっ♡♡

ぷちゅっ♡ずるるっ♡

ぷちゅっ♡ずるるっ♡

すりすりすり♡♡♡

ぷちゅっ♡ずるるっ♡

ぷちゅっ♡ずるるっ♡

すりすりすり♡♡♡

「あッ♡あッ♡あっあ♡♡いいっ♡♡♡中も♡乳首も♡
きもち♡いい♡♡♡」

樹の肩にしがみついていた夢子の指に力がこもる。
それを2人は見逃さなかった。

「クリも触ってあげますね」

ちゅくっ♡♡

「あああっ♡♡それ♡♡いいっ♡♡♡」

樹の指が奥まで入ると太い親指が夢子のクリトリスを
押し潰す。

押し潰される瞬間、燃え上がるように体が熱くなる。

ぷちゅっ♡♡

ずるるっ♡♡

ぷちゅっ♡ちゅくっ♡ずるるっ♡

ぷちゅっ♡ちゅくっ♡ずるるっ♡

すりすりすり♡♡♡

ぷちゅっ♡ちゅくっ♡ずるるっ♡

ぷちゅっ♡ちゅくっ♡ずるるっ♡

すりすりすり♡♡♡

「あっ♡♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡すごいっ♡♡いいっ♡♡♡はっ♡ああっ♡♡」

樹の指のスピードが増す。

しがみついている夢子を絶頂に導いている。

ぢゅくっ♡♡ぢゅくっ♡♡

ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅく♡♡♡

すりすりすりすりすりすり♡♡♡

「いっ♡いっちゃ、うっ♡♡これ、きもちっ♡♡♡いい♡♡いいっ♡いいっ♡…っ♡♡♡」

「いいよ、イっちゃお♡」

「夢子さん俺とキスしながらイってください」

「んあッ！♡♡♡あむっ♡ん、ちゅ♡♡んう♡♡…っ♡んっ♡♡」

今まで乳首を擦っていた淳哉の指が乳首をシコシコ…♡とつまみあげ。

その刺激にビクつく体を制するように樹が覆い被さり口を塞いだ。

夢子の足がびくっ♡びくっ♡と痙攣を始める。

「んっ♡♡……い、く♡♡んんっ♡♡♡ん〜〜〜〜っ♡♡♡」

ぢゅくっ♡♡ぢゅくっ♡♡

ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅく♡♡♡

すりすりすりすりすりすり♡♡♡

ぢゅくっ♡♡ぢゅくっ♡♡

ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅく♡♡♡

すりすりすりすりすりすり♡♡♡

「んん〜〜〜〜〜ッッッ！！！！♡♡♡」

びく…っ♡♡

びく…ッッ♡♡♡

快感が脳内で弾けるように、視界がぱちぱちと光って。

夢子の体が2人の間で跳ねた…♡

「……っ♡♡んむっ♡♡ま、ってえ♡♡」

夢子がガクガクと震えても樹はキスをやめなかった。
絶頂後の余韻まで貪るように、夢子を離さない。
後ろの淳哉も満足そうに夢子の頭を撫でている。

「ねえ樹くん、樹くんの大きいんだからさ、俺が先でいい？」

「……いいですよ」

淳哉の問いかけにようやく夢子の唇を解放した。

樹は夢子を軽々と抱え、淳哉に向かって足を開かせた。
樹との体格差もあるがされるがままに体を扱われていると自分が男のちんぽを挿れられるための道具にされているのではと錯覚しそうだ。

恐らくこの2人はそんなひどいことはしそうにないけれど。

でも、だからこそ興奮してしまう。

「この前は電車だったから、やっと夢子ちゃんと正常位でセックスできるねえ♡」

「あっん…♡♡」

淳哉が既に勃起上がったちんぽを軽くしごきながらクリトリスを撫でる♡

「やっぱ正常位がいいよね、感じてる顔見ながらまんこの奥ズコバコ突くの最高♡夢子ちゃんほら、入るよ♡♡」

「あ…っ♡♡」

まんこの割れ目を往復して愛液でぬめったちんぽが、にゅるっと入ってきた…♡♡

さっきまで樹の太い指が挿入されていたせいか圧迫感はない。

それどころか挿入してすぐなのにもう快感を得始めている♡

ずぶ…っ♡♡

ずぶっ♡♡

「久しぶりの夢子ちゃんのおまんこ、嬉しいな…♡♡ずっと入りたかった♡」

淳哉は心底嬉しそうに笑って、味わうように腰を揺らし始めた♡

ずぶっ♡♡♡

にゅちゅっ♡にゅちゅ♡にゅちゅ♡

じゅぷ♡♡じゅぷっ♡じゅぷ♡♡じゅぷっ♡♡♡

「ん♡あう♡んん…っ♡♡」

「樹くん、夢子ちゃんの腰、固定しててくれる？」

「だそうです、夢子さん、頑張って淳哉さんのちんぽ受け止めてあげてくださいね」

樹はそう返事をして胸で夢子の背中を支えたまま腰を両手で掴んだ。

淳哉の腰が動きやすい位置にがっしりと固定される…

♡

そして♡♡

ごちゅっ♡♡♡

「んッッは……ッ♡♡♡」

いきなり最奥を突かれた…♡♡

ごちゅっ♡♡

ずるるっ♡♡

ごちゅっ♡♡

ずるるっ♡♡

「あ…っ♡♡あ……っん♡…あっ♡♡あっ♡♡あっは♡♡」

「夢子ちゃん…♡ほんと変態ちゃんだよね♡」

ごちゅごちゅっ♡♡

ばちゅんばちゅん♡♡

ぢゅこっ♡♡ぢゅこっ♡♡ぢゅこっ♡♡ぢゅこっ♡♡
ぢゅこっ♡♡

「あっ♡♡あッッ♡♡は、あっ♡♡ああっ♡♡♡んっ♡♡あっっ♡♡」

「〇〇相手に気持ちよくなっちゃって♡その相手とセックスしに来るなんてさあ♡♡このまんこ何？♡とろっとろにしちゃってちんぽ欲しくてしょうがなかったの？♡♡」

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこっ♡♡♡

「んっ♡♡ん…っ♡♡♡んんっ♡♡あ、あっ♡♡あっ♡♡」

「そんなに〇〇ちんぽ気持ちよかった？♡ド変態♡♡ほらほら♡♡夢子ちゃんのためのちんぽだからいっぱい気持ちよくなって♡♡」

「ああっ♡♡♡ああッ♡あっ♡いい♡♡気持ちいいです…ッ♡♡淳哉さんの、きもちいいッ♡♡♡」

ばちゅばちゅばちゅっ♡♡

ぢゅこっぢゅこっぢゅこっぢゅこっ♡♡

熱くて硬いちんぽが夢子の中を擦りあげる♡

長いストロークから奥のほうを小刻みに擦るストロークに変わって♡

夢子の気持ちいい奥を徹底的に攻め始めた♡

ぐちょっ♡♡ぐちょっ♡♡ぐちょっ♡♡ぐちょっ♡♡

ぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょ♡♡♡

「おくっ♡♡奥いいですッ♡♡♡これイイっ♡♡いっ♡あっ♡あっ♡ああっ♡♡」

「夢子ちゃんの感じてる顔見ながら腰振るの最高だよ♡俺のちんぽで気持ちよくなってくれて嬉しい♡♡」

「……ッ♡や…♡あ♡」

「俺にもキスさせて♡」

「んっ♡♡む…っ♡んんっ♡♡…ッ♡♡」

ちゅっ♡♡ちゅば♡ちゅるっ♡♡

夢子は口を大きく開けて舌を突き出し、淳哉の好きなように舌を吸われた♡

どちゅどちゅ♡打ちつけられる腰♡♡

夢子の中の快感が膨れ上がっていく♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅ♡♡

どちゅっ♡♡どちゅっ♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっ♡♡♡

「ねえ♡キスしながら、イこう？♡♡口もまんこもちんぽも一緒に気持ちよくなる？♡♡」

「んあ…っ♡♡なる♡なります♡んっ♡♡んっ♡♡んむっ♡♡はっ♡♡♡」

どちゅっ♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっっ！♡♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっっ！♡♡♡

更に増すちんぽのスピード♡

勝手に腰が動こうとしているのに樹に固定され淳哉がくれる快感をそのまま受け入れることしかできない♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっっ！！♡♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっっ！！♡♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっっ！！♡♡♡

「っあー…夢子ちゃん…♡俺イきそ…♡♡すげ気持ちいい♡♡」

「私も♡私もイきっ♡ます…ッ♡♡淳哉さんのちんぽ♡
♡いいっ♡あっ♡♡んッッ♡♡♡あっ♡♡あっ♡あっ♡
いいっ♡♡」

「夢子ちゃん…♡♡」

「んっちゅ♡♡んふっ♡♡♡ふッッ♡うっ♡♡♡」

■続きは製品版にて♡